

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 鈴木 哲平

本論文は、キャリアの途中からフランス語で創作したアイルランドの作家サミュエル・ベケット(1906-1989)が、わずか四年間で次々に創りだした傑作群、『モロイ』、『マローヌは死ぬ』、『名づけえぬもの』の小説三部作、ならびに戯曲『ゴドーを待ちながら』を、〈切斷〉の詩学という独自の視点から分析した論考である。ノーベル賞作家の代表作ということもあり、先行研究が数多く存在するこれらの作品について、筆者は小説三部作という呼び名そのものに疑義を呈し、執筆時期によって『モロイ』と『マローヌは死ぬ』(1947-1948)、『ゴドーを待ちながら』と『名づけえぬもの』(1948-1950)を組み合わせ、最初の二作は作中人物の書いた文章がそのまま読者の読むテキストになっているのに対し、後半二作は登場人物の語る〈声〉が直接提示されている点に着目、書かれた言葉と声という媒体のあり方、筆者の言葉では〈メディア的思考〉の多様な現れに〈切斷〉の詩学がどのように働いているかを検討している。

全体は三部構成。第一部は論文のキーワードである〈切斷〉の詩学が形成される過程を、初期作品の読解を通して分析。母語で書いていれば可能だったかもしれない豊かな記憶の表現を自ら断ち切り、日常会話における暗黙の了解事項を不可解なこととして遠ざけ、外国語であるフランス語で書くことによって、ベケットが新たな世界を切り開いてゆく過程を詳細に追跡した。第二部では、この〈切斷〉の詩学が最初に結実した作品、『ワット』や『メルシエとカミエ』を検討。その上で、『モロイ』と『マローヌは死ぬ』には、読者がある仮説を立てると、その仮説と両立しない仮説が書き込まれるため、何が書かれているのかわからない宙づり状態に置かれる〈曖昧構造〉が顕著なこと、また『ゴドーを待ちながら』と『名づけえぬもの』は、頭蓋の中で響く声が、何かを言うと直ちにその言葉を否定・撤回・修正する、ある絶え間ない思考の運動そのものを描いていることを明らかにした。第三部では、50年代以降の、ラジオ、テレビ、テープレコーダーなどのメディアを取り込んだ作品群を分析、〈切斷〉の詩学が、解体の方向だけでなく、解体された言葉をさまざまな形で結びなおす〈織り合わせ〉の方向を打ち出していることを明らかにした。

審査では、ベケットの芸術の内在的發展にとらわれて、作家の実人生から作品を理解する視点が欠如していること、〈切斷〉というキーワードがあまりに多様な意味で用いられていること、フランス語で創作する動機の分析が十分ではないこと等への批判があった。しかし、小説三部作と『ゴドーを待ちながら』の詩学を分析するという、研究の現状からいくぶん忘却されつつある高い目標を掲げ、それに向けて独自の視野から切り込んでいった点が高く評価された。作品分析の細部で独創的な成果も上げており、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位にふさわしいものと判断する。